

「家事」についての男女の意識差

13L027 熊倉 千夏

はじめに

この研究の目的は、日本の多くの家庭では、女性が「家事」を担う傾向がある中で、男女で「家事」に対するどのような意識の差が見られるのかを明らかにすることである。現代の日本社会では、共働き家庭の増加に伴い、女性が外で働くことも珍しくない。そうした変化の中、「家事」の役割分担の実際や、それについての意識も変化を被っているのだろうか。インタビュー調査を通して、明らかにする。

1 「家事」は女の仕事？

「家事＝無償労働（アンペイドワーク）」という概念は、女性の家事負担を問い直す上で、重要な概念である。そもそも、なぜ、男は「ソト」で、女は「ウチ」なのだろう？この区別が生まれた要因として、2つが挙げられる。

- (1) 明治・大正期における産業化の過程で大都市に流入した人々（主として農家の次男以下）の中から、第一次大戦後の好景気をきっかけとして、比較的豊かで安定した収入を得られる新中層（ホワイトカラー）が登場してきたこと（経済的要因）
- (2) 国家に人的資源（労働力や兵力）を安定供給する基盤として、旧来の家制度とは異質の家庭が確立され、女性は良妻賢母として子育てに責任を負うべきだという考えが浸透したこと(政治的・文化的要因)等である。¹

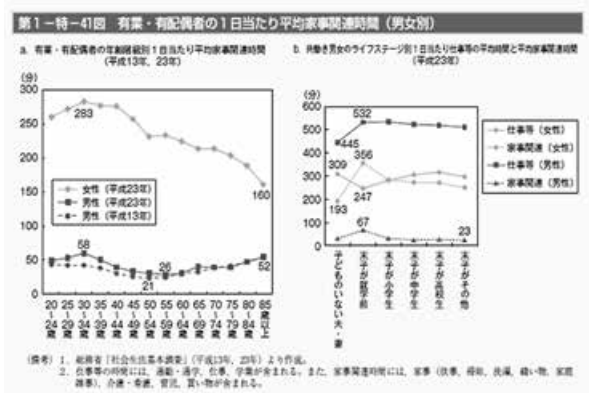
バブル経済の崩壊で日本経済は不況に転じ、女性も外で働かなければならない状況に陥っても、「家事」は女の仕事という傾向は強い。また、今まで、男性の場であった社会は、女性が働くには厳しい社会でもあった。こうして、女性は、家事と仕事の二重負担に悩まされるようになる。

「無償労働（アンペイドワーク）」とは、「ペイされない、つまりお金が支払われていない労働の意味」である。「一方、私たちが会社で給料をもらったり、商店でモノを売ったり、農家で生産した作物を売ったりする仕事は、ペイドワーク(有償労働)」と呼ばれる。²「無償労働（アンペイドワーク）」という概念を提唱したのは、1995年に北京で開かれた第四回国連世界女性会議で採択された、行動綱領であった。

- ① 経済活動の中で過小評価されてきた農業や家族経営企業における女性の貢献
- ② 経済活動として認められてこなかった育児、介護、家事、環境保護、ボランティア活動における女性の貢献

これらを貨幣評価に換算することによって、女性が社会発展に果たしている貢献を目に見えるようにすることが提言された。³

図1



この提言が公表されてから、20年ほどが経過した。以前よりも女性が社会で活躍しやすい環境になったが、共働き家庭においても、圧倒的に女性が男性よりも家事に費やす時間が多いことが内閣府の男女共同参画白書の調査で明らかになっている。(図1参照)

そもそも、一般の男女に「家事＝無償労働(アンペイドワーク)」という概念は定着しているのだろうか。果たして、私たちにとって家事とは、どんな意味を

持つのだろうか。これについては、インタビュー調査から、明らかにしていこう。

2 調査の概要

この調査は、4人1組の調査グループを作って行った。30代既婚男女を対象に友人知人の紹介で、男性3名、女性4名の計7名にインタビュー調査に参加してもらった。調査期間は2015年秋～冬、1人15分程度の個人インタビューである。なお、インタビューでは、家事の認識に関して主に質問した。以下の表に、被調査者データをまとめた。

被調査者	性別	職業	配偶者職業	子の有無
アキコさん	女	会社員	会社員	有
サクラさん	女	会社員	会社員	無
マリさん	女	看護師	会社員	有
リエさん	女	専業主婦	会社員	無
ヒロシさん	男	会社員	パート	有
ダイキさん	男	会社員	専業主婦	有
トオルさん	男	理容師	専業主婦	有

表より、共働き家庭が参加者の半数以上である4世帯となったことがわかる。また、そのうち3世帯は、子どもを持つ家庭であった。

3 インタビュー調査の発見

(1) 男も女も家事は面倒くさい

インタビューをしたどの被調査者からも、家事に対して肯定的なイメージが得られなかった。家事全般について問うと、専業主婦のリエさんは、「家事全般について…一人で全部やりたくないね」と答えた。専業主婦の妻を持ち、自身は理容師のトオルさんは、「家事一、は、まあ、大変だとは思いますが」と述べている。全体に、家事は「大変」なもの、「面倒くさい」ものと捉えられているようだった。

また、家事は「大変」で「面倒くさい」としながらも、家事に対して義務感を持っている様子が見えてきた。共働き家庭で看護師をしているマリさんは、「んーなんですかね…必然？なので、やらな…やるのが当たり前というのがあります」と答えた。パートをしている妻を持ち、自身は会社員のヒロシさんは、「それに慣れてくると、もう完全に、それが日課。自分の仕事みたいなイメージに、ま、仕事とはちょっと、ま、言い方がちょっと悪いんだけど、仕事みたいな感じになっちゃうから、それが自分の生活リズムの中に入ってくるから、それをやらないと、逆にちょっとおかしいなっていう風にはなる」と述べた。もちろん、生きていく上で、家事は欠かせない活動である。その意識を男女共通に持っている様子が見えてきた。

他方、家事と一言に言っても、その内容は幅広い。例えば、料理、洗濯、掃除、買い物などの分野でも、行程は一つではない。洗濯の行程には、洗濯機を回す、洗濯物を干す、乾いた洗濯物を取り込む、たたむという作業が含まれる。家事の中でも、人によって、得意な分野や苦手な分野があるらしい。会社員のサクラさんは、「洗濯は好きかも。なんかあの、汚れてるのがきれいになるのがわかるから。掃除は好きではないかな。やっぱり一人じゃなくて二人いるから余計散らかるし」と答えた。トオルさんも「苦手な家事…んー、まあ、掃除かな。汚れとりの的な、のは苦手っすね」と述べた。家事の中でも、「掃除」は、苦手な分野と答える人が、やや多い印象を受けた。

(2) 家事はやっぱり女の仕事

インタビューした人たちのどの家庭にも言えるのが、特に話し合っただけで家事分担を決めたわけではないにも関わらず、妻である女性が家事のほとんどを負担しているということである。これは、妻が無業の家庭だけでなく、妻が有業の家庭でも見られた。普段、家事は誰が担っているかという問いに対して、共働き家庭で会社員のアキコさんは次のように答えてくれた。「私と夫。主にやっているのは私です。できるときにできる人がやるっていうスタンスです。」どうして、その家事分担になったのかと、疑問に思って尋ねると、このような答えが返ってきた。「うーん…まあ子どもが生まれて私が仕事に復帰した時点で明らかに私の負担が大きい、なので、えーと、育児も家事もできるときにやるっていうスタンスです。でも、やっぱり家にいる時間が私の方が多いため、えっと、割合としては私が多くの家事をやっていると思います」と話した。彼女

の場合、子どもがいることが、家事に大きな影響を与えているようである。仕事と家事と育児のやりくりはかなりの労力を必要とするだろう。

サクラさんの場合は、「あ、ほとんど、私がやっています。どうして？えーっと、二人とも共働きで、収入の方がやっぱり、主人の方がやっぱりあるので、ま、それ以外の一、私の方がたぶん、時間も短いのでそれに伴って、ま、家事負担してます」と答えた。サクラさんの方が夫より勤務時間が短いため、その分、家事を負担しているという。彼女の場合、経済的な要因が家事負担に大きく関わっているようである。だが、ここで留意したいのは、夫が外で長く働けるのは、サクラさんが家事のほとんどを引き受けているからでもあるという事実である。

このように、男性が外で働いている陰では、女性が家事を負担し、支えているという構図が見えてくる。つまり、男性が主で、女性が従という関係を表していると言えよう。対等な関係を築くには、男女の賃金格差の是正や勤務体系の多様化、長時間労働の制限等が必要なのではないだろうか。

(3) 寝る間も惜しむ女たち

昨今、男性の賃金では、家庭を支えられない時代になり、低賃金の女性も外で働かざるをえない状況になっている(図2、3参照)。図2は、この10年ほどの間、夫の年収が低くなればなるほど、女性の就業率が高まることを示している。また、図3では、共働き世帯数が、妻が無業の世帯数を、ここ20年の間、上回っていることを示している。

このような状況の中、仕事と家事の両立を求められる女性は、仕事後の家事に負担を感じるということがインタビューから見えてきた。家事を大変だと思う時について問うと、マリさんは、「あります。えー、仕事をしていて…帰って、お洗濯をしなくてはいけない時とか夜が遅くなるのでそういう時は大変だと思います」と答えた。このように、女性たちは、仕事を終えて帰ってきても、家の仕事をしなくてはならない状況を抱えている。一体、このような女性たちは、いつ休んでいるのだろうか。

一方、サクラさんは、「ちょっと、睡眠不足。趣味でフットサルをやっていて、それをまあ、一緒にやることによってその、洗い物も出る、そこから片付ける。帰ってからアイロンをかける一、って言う流れがあるから、旦那が先に寝てて私がまあ、遅くまでやっている」と述べた。

図2

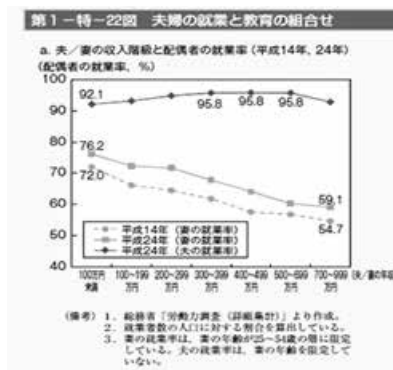
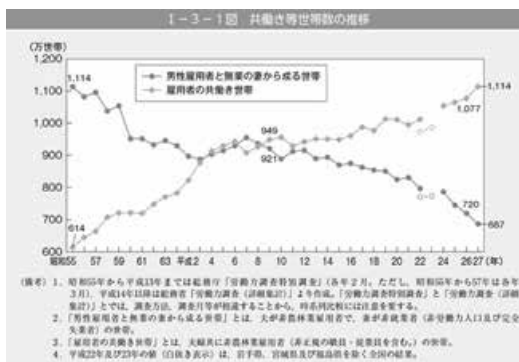


図3



誰しもが1日24時間持つ中、外で働く女性は仕事と家事に時間を割き、睡眠不足に陥ってしまう。いつか仕事と家事の負担で体を壊してしまうのではないかと危惧するほどである。長時間、仕事に拘束される男性と、仕事と家事の両立で疲労困憊の女性が増えていることが、インタビューから垣間見えた。

このような中、アキコさんは、「苦だと思うか…、なんか、仕事をしていて子どもが小さくて、で、夫も帰りがわりと遅いってなると、だいたい22時とか23時ぐらいに帰ってくるんだけど普段は。ってなると、割り切らないとやっていけないってことに気づいてからはあんまり苦じゃなくなったかも。もともと結構完璧に掃除したり、とか、ご飯をたくさんちゃんとか、手作りしたりとかっていうのをわりと心がけてたんだけど、無理！って思っただけからはあんまりこう、強迫観念ってか完璧にやらなきゃみたいなそういうプレッシャーがないから、埃が溜まってても埃じゃ死なないとか(笑)」と話した。アキコさんは、仕事も家事も完璧にこなそうという思いが自分を追いつめてしまって、辛くなってしまったと漏らした。よき母であり、よき妻であるために無理を重ねてしまったのであろう。このような思いを抱える女性は、周りにたくさんいるのかもしれない。

(4) 家族を養うのが男の役目

一方、男性は、どのくらい家事を負担しているのだろうか。普段、家事はしているかという問いに、ヒロシさんは、「うん、カミさんもパートで働いてるんで、お互いができるときはやる。たとえば夜も、帰ってきて、向こうが遅ければ、俺がやればいいし」と答えた。また、トオルさんは、「んー、お互いできることは、お互い時間があるときに、やるような感じで、特に、あの一、誰がこれする、あれするとかじゃなくて、まあ、気づいたらお互いがやるような感じで」と述べていた。さらに、専業主婦の妻を持ち、自身は会社員のダイキさんも「はい、できるときは妻の手伝いをしますよ」と言う。しかし、お互いができるときに、できることをするという夫たちの認識から欠落しているのは、「気づく」のは圧倒的に妻であるという現状だろう。このことが示すのは、家事は男の仕事ではないという意識の考えが、男性たちの根底にあるということである。日本の現代社会では、いまだ、男性が家事や育児に参加しづらい環境にある。働く男たちはお金を稼ぐことで家族を支えている意識が強い。よく、ドラマでも、家のことは妻に任せっきりで、夫は仕事に精を出し、家庭を顧みないため、妻が愛想を尽かし、夫から離れていくというストーリーが描かれる。家族を養うために働く男性も、家庭を守り、働く男性を支える女性も、共に、我慢の限界に至ってしまうという悲劇である。男性たち自身も働くことで、家族を支えなければならないという意識にとらわれていると言える。なぜこの連鎖は断ち切れないのだろうか。

(5) 男の家事は単なるお手伝い

そんな男性陣に、普段どのような家事をしているのか尋ねてみた。ダイキさんは、「はい、あの一、皿洗いとか…掃除ですかね」と答えた。また、トオルさんは、「まあ、基本一、飯は、

えっとー、カミさんで、あと、ゴミ出し、食器洗い、と、なんだろなー、ま、掃除も自分のところは、とりあえず自分で。あとだいたい、風呂とトイレぐらいかな。部屋はみんなカミさんが。うん、やるような感じっすね」と述べていた。そして、ヒロシさんは、「分担でやってるのは朝だけ。布団あげたりだとか、あと、風呂の掃除したりとか。あと、食洗器に入ってる食器を片付けたりだとか。その程度かな。あとは、奥さんに任せてる」と話した。男性は、家事の中でも、あまり時間のかからない、皿洗いやゴミ出し、掃除などの役割を担う傾向があるようである。つまり、男性の家事負担は、ちょっとしたお手伝いにすぎないということである。夫は、経済的に家庭を支える役割を担っているため、妻は夫に家事を頼みづらい心理が働くのかもしれない。あるいは、女性自身が「家事」というテリトリーに男性が立ち入ることを拒んでいるのかもしれない。家事は女性の役割であり、仕事は男性の役割であるという固定概念が、男女どちらにも根付いている結果だろう。この概念から脱却しない限り、真にお互いを尊重する社会は築かれないのではなかろうか。

おわりに

これまで、インタビューから、「家事」における男女の意識差を述べてきた。3章1節では、男女の共通認識として、家事は、「一人でやりたくない」、「大変」な活動という否定的なイメージがあることを示した。しかし、「やるのが当たり前」という義務感を持つ側面があることも確かであった。また、家事の中でも、人によって、得意な分野や苦手な分野が存在することに触れた。

2節では、インタビューした家庭の家事分担は、妻である女性がほとんどを負担していることに言及した。さらに、それは、共働き家庭においても同様であった。その要因として、育児や経済的な面が挙げられた。ここでも、男は「ソト」で、女は「ウチ」という概念が表れていると言えよう。

また、3節では、男性の賃金の低下に伴い、共働き家庭の増加による、女性への影響を述べた。インタビューで家事を大変だと思う時について、「仕事が終わって、夜遅くなる時」や「睡眠不足」と答える女性がいた。特に、共働き家庭の女性は、仕事と家事の両立に苦労していることがインタビューから伝わってきた。インタビューした人の中には、「完璧に掃除したり、ご飯を手作りしたり、を心がけていた」頃は、苦労したが、「無理」と思ってから、楽になったと漏らした人もいた。誰に強要されたわけではないにも関わらず、自分の理想を求めるあまり、自分自身を追い詰めてしまう状況を生んでしまったのであろう。女性の仕事と家事の両立を軽減する対策が必要だと考える。

さらに4節では、男性がどのくらい家事に参加しているかについて迫った。「気づいたら、お互いがやる」や「できるときに手伝う」と答える男性がほとんどであった。そのような夫たちの認識から欠落しているのは、「気づく」のは圧倒的に妻であるという現状だと指摘した。このことはつまり、家事は男の仕事ではないという意識が男性の根底に存在していることを示している。男の仕事は、経済的に家族を養うという意識が男性に強いと言えるだろう。

そして、5節では、実際に男性が担っている家事について議論を展開した。具体的には、「皿

洗い」や「掃除」、「ゴミ出し」などの比較的簡単な役割を担う傾向にあることがわかった。つまり、男性の家事負担は単なるお手伝いの域に留まるということである。このことから、男性は仕事、女性は家事という概念が男女どちらの認識にも根付いていることがうかがえた。

結論として、男女ともに家事は、生きていく上でなくてはならない活動と認識しつつ、そのほとんどを現代の日本家庭でも、女性が担っていることが明らかになった。女性の社会進出が叫ばれる時代でも、男は「ソト」、女は「ウチ」という思想は、依然として変わらないということが、浮き彫りになったともいえる。これらの状況は、経済的な要因や歴史・文化的要因も深く関わっている。また、男女とも「家事＝無償労働（アンペイドワーク）」という認識が薄いように感じられた。「労働」というと、外で働き、収入を得る行為に限定されてしまっているのかもしれない。家事は誰にでもできる活動、という偏見や評価の低さも影響している。それに対して、良くも悪くも女性自身でさえも、女性が家事を担うことを当たり前とみなし、何も疑問を感じなくなっているように見える。あるいは、そのことについて、疑問を投げかける場すら用意されていないという、社会における女性の立場の低さが隠れているのかもしれない。

一方、男性自身は、賃労働者として、家計を支えることが男の役割と考え、家事に対する認識が弱いようである。共働き家庭でも、その認識は変わらず、社会でも家でも地位が低く見られがちな女性が、仕事と家事を引き受ける形になっている。これほどまでに男は「ソト」、女は「ウチ」という概念が浸透しているのかと思知らされた。当たり前になった根本を覆すことは難しい。もし、「家事＝無償労働（アンペイドワーク）」という認識をすべての男女が持ったら、お互いが生きやすい社会が築けるかもしれない。有償労働も無償労働もたやすくはないからこそ、どちらかに負担が偏らないように、バランスのとれた生活を営むことができるだろう。しかし、たとえすべての人間にその認識が備わっても、今のままの福利厚生や雇用条件では、実現できないであろう。この問題の改善には、政治・会社・家庭の3つの改革が必要になってくる。「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるでもない。唯一生き残るのは、変化できる者である」と、イギリスの自然科学者であるチャールズ・ダーウィンは述べた。いつまでも昔の常識にすがってはいけぬ。時代の変化に対応できる社会を築くことが今の課題かもしれない。

注釈

- 1 加藤秀一、石田仁、海老原暁子『図解雑学 ジェンダー』ナツメ社2005年、62頁。
- 2 久場嬉子、竹信三恵子『「家事の値段」とは何か』岩波書店1999年、2頁。
- 3 加藤秀一、石田仁、海老原暁子『図解雑学 ジェンダー』ナツメ社2005年、115頁。

図1- 「内閣府男女共同参画局/第1-特-41図 有業・有配偶者の1日当たり平均家事関連時間(男女別)」(2014年)

(http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-41.html) (2016年5月29日取得)

図2- 「内閣府男女共同参画局/第1-特-22図 夫婦の就業と教育の組み合わせ」

(http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-22.html) (2016年6月3日取得)

図3- 「内閣府男女共同参画局/ I -3-1図 共働き等世帯数の推移」

(http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h28/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-03-01.html) (2016年6月3日取得)

(指導教員 虎岩 朋加)